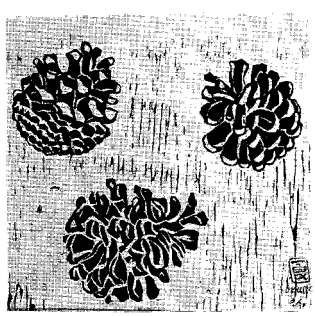
心にしみる いい話

北海道新聞社編

北海道新聞社

心にしみる いい話



北海道新聞社編

北海道新聞社

心にしみる　いい話

一九九四年十二月二十日一刷発行
一九九五年三月十六日八刷発行

編者　北海道新聞社
発行者　沼尾良夫
発行所　北海道新聞社
札幌市中央区大通西三丁目
郵便番号〇六〇—九一
編集〇一一(二一〇)五七四二
営業〇一一(二一〇)五七四四
振替　〇二七九〇—六—二八三九八
印刷　三陽印刷

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

ISBN4—89363—757—6

はじめに

いま、物が価値の中心になって心がおろそかにされ、そうしたゆがんだ社会の中で人と人のかかわりが崩れつつあります。

しかしそうした中でも、私たちの周辺にはしっかりした人間関係が保たれている風景がたくさん見聞できます。今回、そうした話をみなさんから応募いただき、それを多くの方に読んでいただくことで、人間関係の回復のきっかけになればと企画しました。

三百八十五編の応募原稿の中から、厳選されたものが本書に収録されました。どれも読む者の涙をさそい、心を打つすばらしい作品ばかりです。

また収録されなかった作品も、本人にとってはたいへん貴重な体験を書かれたものばかりでしたが、しかし読む側からみて〝心にしみる　いい話〟つまり感動という点でいくぶん不足し、残念ながら今回は見送らせていただきました。

もしこの作品集が好評で、引き続き第二集を編むようなことになった折には、新しい素材でテーマに沿った書き方をして再応募いただきたいと思います。

一九九四年十二月

北海道新聞社出版局図書編集部
「心にしみる　いい話」係

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

心にしみる　いい話

目次

I　大いなる心

先生の万年筆　清水久仁恵……12
最後の手紙　椿　玲子……15
おばば　赤坂明希子……18
心の中の肖像画　吉田　徳夫……22
父の親友　中嶋　康二……26
大家さんの温情　佐藤　敏夫……30
一つのおにぎり　佐藤　伸……33
厳寒の往診　渡辺　太郎……37
価値あった数カ月　森　多美子……42
法話から学ぶ　豊嶋　静子……47

東洋の光　中村　生子……51

II　風景をつくる人

ボク教えてあげる!!　工藤　秀勝……56
野の花　立花　英人……59
細い雪道で　斎藤　全……62
ある温情判決　大橋　光正……66
音　仲田　勝久……70
出勤バスの紳士　石掛　順子……73
国電の老婦人　池山　善久……76
思いやりとリハビリと　林　義夫……79

III 家庭のかたち

母の家出　米山　昭二……84
九月の扇風機　小林　房夫……88
兄　小山田由紀子……91
おじさんから教わった　北原　英樹……95
S君に陽報あれ　佐藤　貞勝……98
母の御守　伏見　茂……101
うたた寝と扇風機　中川　洋子……105
豆腐屋ケンちゃん　長谷川雄次……108
父母のあのころ　松宮　邦子……110
やまどりを追って　上月　正明……114

二人きりの最期　千田　勲……118
家族の肖像　益山　久男……122
ムジナの話　岡口　露子……126
中秋の夜の父　藤本　忠雄……130
親孝行の裏側　久保富美子……133
息子への手紙　木戸　克海……136

IV　学校のなかで

無事に戻ったお金　中田　慧子……142
思い出の先生　伊藤　末治……145
アンカーのあいちゃん　住谷　雅理……149
「モンペ」との再会　竹中　征機……152

美しきかな　夏　ひろ子……154
感動賞　中村　良子……158
一足の長靴　森本　伸一……162
出船の位置に　井上　能孝……166
「生きること」の教え　能登　良夫……170
いい子の道草　畑山　和昭……174

V　ふれ合いの光景

工場長夫妻の勇気　前田　保仁……180
しまい湯　大竹由美子……184
うれしかった日　片岡　絢子……188
西村座・最終上映　吉村美衣子……192

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

やさしい人たち　岡田美智子……196
車イスの健ちゃんと　渡部　勝栄……200
最後のクリスマスプレゼント　青木　弘子……204
羽織と袴　菅原　義三……207
石に刻んだ江差追分　松村　隆……210
寺のおっさん　斉藤　満……214
「木守」の心　磯崎　靖明……217
夢　池田　健……220
カードローン苦からの脱出　佐藤　善也……223
折り紙おじさん　蒲　利昭……227
親友の恩情　瀬川　みえ……230
天国からの贈り物　高橋　栄子……234
不思議な縁　今　喜代吉……237

カバー装画・大久保一良

I

大いなる心

先生の万年筆

清水久仁恵
（主婦・65歳・岩見沢市）

この話は私の小学校四年生時代の思い出です。ある日、一人の少女が転校してきました。先生の紹介が終わると背の高い少女は一番前の席に座ったのです。どうして後ろの席ではないのかしらと思いましたが、きっと目が悪いのだろうくらいに考え、疑問は持たなかったのです。

その少女・高岡さんはすぐ皆と仲良くなり、クラスの中にとけこんできた頃、お習字の時間に思わぬことがおきました。墨をする音しか聞こえない静かな空気を突然破るようにガタガタ机をゆする音がして、高岡さんがあばれ、うなっているのです。

びっくりした私たちはただおろおろするばかり。すると教壇から先生が急いでかけおり、高岡さんを押さえながら『すずりをどかして、皆で押さえて』と大きな声で叫びました。

前後左右の友達はどきどきしながらも一生懸命に先生の真似をしました。少し経つと高

岡さんは動かなくなり、いびきをかいて眠りましたが、すぐ目をさまし何事もなかったように視線を前に向けました。

その時です。ふと机の下を見るとおもらしの跡が水たまりとなっているのです。先生はすぐバケツと雑巾を用意して拭こうとかがんだとたん、胸ポケットから万年筆がポトリと水たまりに落ちたのです。私は「はっ」として体が固くなり『どうしよう』と思わず先生の手元に目がいきました。

すると先生は万年筆をひろい上げ、さっさっと振りながら『しょうがないよなあ、高岡いいんだよ』と笑っているではありませんか。子供だった私にとっておもらしは汚いイメージがありましたから、先生の何気ないしぐさに驚くとともに、やさしい気持ちが素直に伝わり『すごいなあ、先生は』と思ったことを今でもはっきり憶えています。

放課後、高岡さんの席がどうして前であったのか、また、高岡さんの病気についてもお話があり『何もこわがらなくていい。時間が経てば必ずおさまるのだから、発作のおきた時は皆でケガをしないように押さえてあげよう』とクラス中で話し合いました。次の日、先生の胸ポケットを見ると、例の万年筆がちゃんとおさまっていたので私はほっとしました。

それからも、なぜか、お習字の時間に発作をおこすことが幾度もありましたが、それぞれに役割が決まり、先生の手助けをしながら静かになるのを待ちました。私は家に迎えを

頼むための電話係、二人一組で電話室に走ります。むかしの電話は柱の高いところに取り付けられているので子供では届かないのです。背の高い友が私を支えやっと電話をかけたのです。

クラス中が発作にも慣れた頃、高岡さんの席は前から後ろに変わりました。家族が迎えにきた時、目立たないで教室の外に出られるようにとの先生の気くばりでした。がそれからも変わらなかったのは先生の水たまり拭き。腰をかがめ雑巾片手に拭き、しぼることの繰り返しを私たちはいつも見ていました。

あれから五十五年以上経った今でも、水たまりに落ちた万年筆の音が耳の奥に残り、子供心に本当のやさしさを先生から教えて頂いたと思っています。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.